

平城京西一坊大路の調査（平城第546次）

奈良文化財研究所は、現在本庁舎建替事業を進めています。2014年2月より旧庁舎の解体工事を始め、これと併行して同年4月から2015年2月まで新庁舎建設予定地を中心とする発掘調査（第530次調査）をおこないました。これらの調査成果は奈文研ニュースNo.54・57でお伝えしたとおりです。

今回の調査は、第530次調査であきらかになった一条南大路北側溝の変遷をふまえ、これに接続する西一坊大路西側溝との関係や周辺の土地利用のあり方をあきらかにすることを目的としました。調査は2015年4月6日に開始し、6月17日に終了しました。調査面積は1,008m²です。

今回の調査では、西一坊大路西側溝の変遷があきらかになりました。西側溝は新旧2時期あり、古い側溝を埋め立てて、再度新しい側溝を掘り直していました。さらに、この掘り直しに際して、側溝の水を一時的に迂回させる溝を西一坊大路と一条南大路の路面上に掘削していたことが新たにわかりました。

この迂回溝は、地盤が弱いところや側溝が直角に曲がるところ等、水の流れで大路の路肩が崩れやすい場所にあたっています。これらの場所では、溝の掘り直しと同時に、堅く締まった土による整地が施されており、路面の浸食や崩壊を防ぐための工夫と考えられます。どうやら、これらの工事は側溝の掘



調査区全景（南から）

り直しだけではなく、西一坊大路と一条南大路の造成や路肩の強化をともなう大規模な大路の再整備工事であったようです。

また、このような大がかりな工事にも関わらず、西一坊大路西側溝の水を、一条南大路を横切って地形の低い南へと流すことはしていません。これは、平城宮佐伯門前の広場機能とその前面に続く一条南大路の重要性を反映していると考えられます。

第530次調査の成果も考えあわせると、迂回溝をともなった西一坊大路と一条南大路の再整備工事は奈良時代後半におこなわれたものと推定されます。奈良時代後半には西大寺の造営や北辺坊の設置等、平城京右京北部域の大規模な再開発がおこなわれています。今回の調査成果は、この再開発にともなって、右京に面する平城宮の西面中門である佐伯門前の広場や西大寺へのメインストリートとなる一条南大路の整備がおこなわれた可能性を示唆するものです。これらは今後出土遺物の整理作業を進めながら、さらに詳しく調べていきたいと思います。

また、今回の調査では、西一坊大路が廃絶した後、調査区北部を中心に平安時代後期の掘立柱建物群が展開することもあきらかになりました。中には、居宅の中心施設になるような大規模な建物もあります。平城京が廃都になった後の土地利用の実態をあきらかにする手がかりとなる成果です。

（都城発掘調査部 小田 裕樹）



西一坊大路西側溝から迂回する溝（北西から）